

## 日本人のあきらめについて

エドムント・ヘルツェン  
小島 尚 訳

私が最近東京の町中を歩いた時、不思議な観察を致しました。中央停車場から多くの旅行者がやって来まして、その大部分は日本人でしたが、外国人も多数おりました。人間というものは自分がどうでないものにひかれる性質があるのですから、自然の権として特に婦人の運行人が私の注目を引きました。そして面白い事実ある事を発見したのです。つまり、日本婦人は西洋の婦人よりも一見幸福そうなくとも円満な性格を持っているという発見であります。日本婦人ははるかに優美で種々とした軽やかな動きをしているばかりでなく、特に外国婦人のそれとは全く異なった表情が、私には目立つたのです。日本婦人の顔は、私には独特のやさしさ、温和さ、柔さがあり、たゞぞる微笑をかくすかに漂わせているように思われ、これと対照して外国婦人の顔は硬く心配げで、身まわりを忙しげにしており、二三の婦人は髪をずかしげにさへ見えました。しかしこの場合日本婦人の大部分は仕事からの帰りらしく、したがっておそろくは骨の折れる一日の仕事のあとで帰ったでありましたが、これに反して大部分の外国人の方は薄着らしく、したがって休暇をきっていたのであります。

日本男子と外国男子の間の相違を私はその翌日仙台行の列車の中で観察出来たのであります。無論それを見ていた唯一の外国人は私自身だけであつたという事をつけ加えなければなりません。しかしながら多分皆様は私がこれからお伝えしようという事件に対しての私の反応の仕方が、ヨーロッパの男子にとっては全く典型的なものであるという事に賛成して下さい。汽車は非常に旅行者が多かつたのですから、普通の大きさの半分しかない食堂車へは大ぜい殺到しておりました。それで、両方の入口には、待つ人で非常に混み合つていたのです。私自身もその中のひとりで順番が来るまで一時間半も待たさねました。私は待たさねば待たさねるほいらくして、又いら／＼したばかりでなくひそかに腹を立つて来ました。つまり先客の四人の紳士のグループが、待つている人達が多いのに舌がかわらず、何ら席を立つ手段を講じないという事に気が付いたので、彼等は次から次へと飲食物を注文し、人生は永遠であり且つ彼等が唯一の客であるともいふた風に、坐つたり心ざけたり談笑していました。この人達の顔は私には愉快極まるものではありませんでした。それらの顔は待つている人達に対する彼等の態度に於てしめした傍若無人さに相応しいものでした。しかし、不思議な事は何人かそれらを横視してはいないやうに思われた事です。ヨーロッパなら確に半時間かたつたらもう謝罪の結が切れて人々のところに行つて、おそろくは丁寧でもごまかす力強く次のように注意した事でしょう。「待つている人は純粋な無欲な客ではなくて空腹を抱えた血も肉もある人間なんです」と。ここでは、こういう事は一つおこらず、待つている人達も誰をも焦燥のあとだに示さず、むしろ、四人の傍若無人のふるまいを批判し反抗せず甘受していたのです。私は約二十分もかかつて食べ終つたあとでも、前記の人達はいぜんとして席を占めておりました。もっとも、そ

のうちに私の怒りも消え失せ、知り度いという好奇心が、その代りに生じたので、その隙にそんな飲食者達もどう／＼その席を空けるに至るまで食堂車の中に立っていました。それから十分もたつて漸く彼等は席を立つたのですが、少くともその二時間もそこに彼らは居たわけです。ところが、もっと不思議なことがおこつたのです。すなわち、新しく入つて来た四人の男の客は、そこに長いこと座つてさんざん待たせた先客にお詫びを述べた事なのです。つまりこの知らない人の入席に對して折角の保護をまたげたといつてお詫びを言っているではありませんか。かくも平氣そうに待つていた日本の男子の一人が、この事柄をどう考へてゐるかを知り度いと思つて、その人に食堂車を去ろうとしている四人の傍若無人な人達を指して「あの人達は何しろセントルマンですか」と言いました。それに対しては、微笑した顔付をして「しかなかった」といふ返事なのです。

さて私は車室にもどつて来た時、居合せた客の一人の携帯用ラジオから一つの歌が聞えてきました。その歌のメロデーは半ばアメリカ的半ば日本的なひびきがありました。二三英語もその中に交つていました。私の依頼で車中のどよみの客はゆつくりと歌謡をくり返したので私は次のように書きとる事が出来ました。

あなたのリードで

しまだもやれる

キークダンスのなやましさを

みだれるすそを

なつかし、うれし

この歌はどよりの客の説明によれば、二三年前に随分流行つた「芸者ワルツ」という流行歌だそうでした。いくらからうら悲しいひびきをそつていきました。そしてあとで仙台の一大學生がそれを私に繰返してくれた時、この軽いうら悲しさは芸者が最初の踊りで彼女の中の喜びを感じた恋のはかなさの感情に由来するものである事を知りました。

この三つの小さな経験から出発して、おそらくは矛盾する多くの他の性質の中で私には最も大事なものと思われる日本人の特徴を特記したいと思ひます。その一は経験に於ては私にはつまり温和、親切、微笑が目立ちました。しかしこの印象は外國人として日本人の顔から得るばかりでなく、新米客はこの事柄をやがて全日本人の生活の一切を覆く雰囲気としてあります。つまり、服装、家、庭、交際の形式、話し方、服装、手紙等や店の客の取扱ひ方、手紙の文体等の雰囲気としてであります。こういう気分を最も強く何時も感じたのは、提燈の光に照らされ小ざらめ境の同じようにサラ／＼流れて来る音が、この気分をいやまじに添めてゆく夕方に特にすばらしい日本の産物の一つにたえずんだ時であります。私は日本の事柄はあまり知りもしないくせに一寸外國の言葉を聞いても、日本生活の命令と、日本人の態度は深く「もののあわれ」の感情に動かされてあり、これについて久松潜一氏は「それは小さい光をまつたほの明るい暗さであり、明るい

楽しい微光をもったうら悲しさである」と言っております。(徒然草の縁説、東京、一九四〇年二三頁、O・ペンル記より引用)。私の思  
い違いでなければこの感情は生活の喜びと生活の苦悩の混合であるように思われ、この場合、哀愁、憂うつ、の暗音は決して消え失せ  
ないであります。

おさえられた哀愁のこのまごころなき要素は現に日本人的生活に於ける支配的な雰囲気の意味に理解されているこの「微光」がなぜ決  
して完全なる笑いとならないかをあきらめなくては説明するものであります。完全な笑いとくのない笑いはあらゆる事物に対する偉大なる肯定  
の表現であり、この肯定は現世にあって完全にアットホームに感ずる、素朴な魂から生ずるものであります。(もつともこの素朴さは決して  
ぜんぜん子供らしくあるばかりでなく又反省的でもありアイロニカルであることさへあります)しかし乍ら日本人の微笑は素朴ではなく  
て感傷的でありまして、しかもこれはその微笑があらためる表現であるためなのであります。

この命題を説明するために私は二の事件の吟味に移ります。食塵重の中に待っている人達の態度は落付いた受身であって、あらゆる千  
差万別の行動の放棄であつたのであります。その人によっておそれくは別段深く考へずに口にされた「しがたがない」という言葉は無意識に  
受身の基礎となつてゐる考へ方を断然明確的に表現したものであります。ある事を変える試みを前にして言われる「それは変更出来ない」  
という語は、あらゆる計画的な目的を定めた干渉的な攻撃的な態度に対する深い嫌悪を示すものであります。人はむしろその事物を成行に  
まかせること、即ち順応し、耐え忍び、変更出来ないこと考へらるゝものに順応する事にかたむくものであります。これはつまり東方の否  
定、断念、おさめを意味します。それは又自己主張への要求を最初から制限する事を意味します。そこから私が、しばしば日本のあらゆる  
る社会層の人々から得た没我の印象が、生じて来ます。この暴力否定と没我は微笑とあつた一般的精神の構成要素のように思われます。  
以上の二つは例えれば日本ではドイツとは大いに反対に、自説を固執する人間を見出すのは非常に稀にしかないのであります。ありま  
す。同一の理由から日本では無論、論争に対する純粋なよろこびから、議論を愛する理論的精神の死にもの狂いの衝動がないのであります。  
「しがたがない」という事は即ち哲學的には深い懷疑主義即ち、疲れたおさめを意味し、つまり人間は理想と話し合いによって真理を見  
出し得るという可能性に対する原則的な疑問を意味するわけでありまして。

オオの小さな体験即ち、はかない恋の流行歌に耳を傾ける事は、前の二つの例で得られた觀察を更に深める事が出来た。この歌の中に  
は何か浮世なものが含まれてゐるとは私は信じません。なぜなら浮世であるためには人は或る事に完全に無關心に陥れて物を振る  
ような態度であらねばなりません。そのように完璧な觀察方法はどこでは全然感じられないのであります。この歌の基調は私にはむしろ、  
ゆるうつであるように思われます。すでに恋の初めに於てその結果が先んじて考へらるゝのであります。これは人の心か或は男心だけで  
も変り易さについてのやさしくもいじらしい幻滅感の中にあるのであります。恋の結果をこのように早く先んじて考へることは、日本の文  
学に於ても非常にしばしば目につくことであります。例えれば吉田兼好は恋の放棄をたえざる諦めと同じ呼吸の中から、来世を忘ねず、佛陀

の教を宣明するように警告してゐるのであります。(徒然草三と四)。所で無欲の状態である涅槃は實に歡樂の原理の原型であります。衝動は欲望を露き、興奮をなくし、絶対的安寧に達します。おそれなく日本において若い男女の情死があの様に頻繁である理由の一つでありましょう。しかしながら涅槃、消滅への衝動は同時に歡樂の極端なあきらめを意味します。何故なら欲望の消滅は反省の主体たる個性、自我の終末を包含するものでありますから。しかし反省的な自我のみが真にそのを享受することが出来ます。歡樂はその本質上意識的な享受であります。動物は單に陶醉を受けるだけです、人間は自分の体を歡樂の道具手段たらしめることができます。多くの日本人や外国人の觀察者は、日本では性欲が他の国よりも強いという説を主張しますが、この説が當っているとするれば、その原因は素するにあきらめであり、つまり歡樂の早い終末への不安が衝動を起すのを致します。種々の衝動の中で最も有力な性欲、生(せい)自身はこの性欲から生ずるため、ひたすら生の衝動であるこの性欲は、あきらめ、即ち完全な満足に対する絶望的な断念によって、死の衝動へと変へらるるのであります。慾及び生の断念と死の憧憬は相接近してあります。日本における死の讚美と死の覺悟——その奥においてはともかくハイツ精神と一致した精神が存するのであります——はたしかに根本的な生の放棄と関連してあります。死への賛意は人があきらめること、生(せい)の甘さが氣が振けてしまったことを前提としたことです。映画や小説に於て失恋を好みハッピーエンドを片けることは仙台の學生において再三受づいたことですが、これは多分断念の態度から来るものでしょう。苦難を喜ぶ堅持は露りなき幸福の可能性に対するひそかな絶望より生ずるわけであり、あります。

わたしたちの今迄の觀察がわたしたちを迷途(めいず)へ即ち誤れる道へ導かなかつたと仮定すれば、わたしたちは本質的な結果として次のことを確信できるのであります。つまり日本人のあきらめの中には、自己主張の阻止として、自己の放棄として、没我として特徴づけることのできる断念が存するのであります。さてわたしたちには更に最も重要な断念二つ、即ちもう一つの現象からその根底をなす本質へと突き進むことが露されてあります。従つて我々ばかりの「没我」の究極本末の根底は何ぞやと問うものであります。

我々ばもう一度久松氏のもののおわけの説明の試み「小さい光をきつたほの明るく暗さ、おかるい奈しい微光をきつたうら悲しさ」という語を觀察してみましよう。ほの明るく暗さとは何でしょうか、光とは何でしょうか、うら悲しさとは何でしょうか、奈しい微光をきつてゐるものとは何でしょうか、ものというディングででしょうか、あわれという感情ででしょうか、久松氏はそれらの定義をおわけの上にも、ものの上にも一義的に並べたてないために、氏の説明は極めて不明瞭ではないでしょうか、しかし私の推測するところでは久松氏はここではわざと一義的な定義を与えていないのであります。定義を讀者に關係づけることによって氏はおそれなく、あわれの感情の本質的なものを即ち感ずるものと感ぜられるものとの不分離の一体を突発的に開明しようとしたものでありましよう。この説明が正しいものとするれば、あわれの感情の中において人間は一見ものの中に、ディングの中に、全存在者の中に即ち世界の中に同化してしまふのであります。世界は人間の中に消滅し人間によって溢れてしまふといつても差支ないでありましよう。

ものゝあわれは靈魂の強い動きにおいて、又人間の心の深い感動に於ておそくは特に悲痛な体験、とりわけ、恋愛の中に表われて来るように思います。

恋せず試人は思ふなからまし

ものゝあわれはこれよりなる

(ベンル、第廿二頁。ベールの聖訓によれば後叙の歌)

恋の中に人間の個別化が放棄され、就身の中に二人の人間が相互の中に没入し、認識の中に二者の体が一体となるのであります。自己感覚は消け散り、以前にわかれていた二人の人の合一の中に流れ去つてしまふのであります。

主体と世界の合一が主として恋によつて開かれるとすれば、あわれの感情はたゞすらすら抒情の舞臺であるといえます。なんとなければ、恋するものにあてはまるものは詩人に専らあてはまるからであります。恋に対する手堅い公式は「私は君の中に、君は私の中に」であります。これは、心は世界の中に、世界は心の中にあるという抒情的气氛にこそ正確にあてはまります。抒情詩的气氛はある深い同情、即ちこのギリシヤ的言葉の本末の意味に於ける共に苦しむことの表現であります。苦しむと共にするものは事物に対して冷たく対立せずに、事物の生命の流れに身をまかせ自己自身を忘れてしまふのであります。

この自己自身を忘れる態度の正反對、即ち主客の諸要素の対立、世界の対象化、主体と客体の分裂、自然と精神の分裂は、さて周知の如くヨーロッパ精神の特色であります。これはその最も純粋な形式に於ては無主客の統一、距離的に探求的に観察することであり、  
「最高原理のものは」とアリストテレスは言つてあります。「精神は現象であり」また「自由なものは他人のためではなく自己自身のために存在する人間である」と。即ち純粋現象のかかる状態の中に生きる人間こそ自由なのであります。(形而上學一、二、九八二五、一〇七二一、一〇七三〇)アリストテレスは神の理解からこの思想に達してあります。つまりアリストテレスの神は自己自身のみを考へる純粋原理であります。純粋原理は全世界を動かすとは云え、自らはこの世界によつて「動かされない」のであります。純粋原理はたしかに愛されるのであります。自分自身は愛することはいけません。純粋原理は自分自身でない一切のものは無關心に、絶対的自足の中に留まるのであります。

神は自己自身のために存在するといふこの神学的思想の人間への復帰は最初ヨーロッパに於て今日では全世界に於て自由意識の深化を増す源泉でありました。しかしながら自由への欲求は「自己自身のために」存在するように、事物との合一から自己をとりはなしたことの要求であります。したがつて自由意識は最強の我欲であり事物を処理する力への意志であり、之をもつて事物は用ひられ形造られ、それを受用するために自己に提供され得るのであります。「精神」はしたがつてヨーロッパ哲學に於ては事物と溶け合つた合一感を意味せず、世界に対する自意識なのであります。この自意識はあわれ感が無精神であると同様に無靈魂であります。精神は新しいものをエ夫し、単に実在

するものの勢力を破り、常に同一に留まるものとして自己を自然から引きはなし、自己を受身に規定させる代りに能動的に自ら規定してゆく想像に富む力なのであります。この精神は合一感のように世界にとらわれるものではなくて常に既に世界を越えるものであります。この精神はあり得るかもしれないがまだ存しないものに照して世界を觀察するのであります。近代精神は本質的には成り得るかもしないものの可能性の意識であります。この理由から近代精神は革命的であります。それは生産的な意識であり、自己の意識の空想を自己自身の外に連れ出し、その空想の姿によつて世界が「自己自身のために」存在するように世界を形成せんと試みるのであります。近代精神は自己の自覚性に基づいて今まで決して何処にも存在しなかったものを實現せんとするユートピア的力にみち／＼てあります。ヘーゲルはキリスト教と結んでギリシャ哲學家が科学によつて発展して来たこの精神を比喩なく特色づけたのであります。彼のいうには「ヨーロッパ精神の原理は……自意識の理性であつて、これは自己に対して超然し得ざる限界は何もあり得ないという信頼を自己にもち、したがつて自らその中に包含せざるために、一切を侵奪するものである。ヨーロッパ精神は世界を自己に對立させ、自己を世界から解放するのであるが、この對立を再び取り上げ、自己と異なる多様なものを自己の中に、自己の單純さの中に取り戻すのである。」と。この精神は一度誇張していえば貪欲な欲望であります。この精神はヘーゲルによれば「自己に對立する他者を自己のものにせんとする。ヨーロッパ精神は理論的にも實際的にも自己と外界との間にまたざるべき統一に向つて努力している。ヨーロッパ精神は世界の支配を自分に確保してくれたいエネルギーをもつて外界を自己の目的に吸収せしめるのである。」と。(科學百科全書附録三九九節)

ヘーゲルは此のヨーロッパ精神態度に對して、古代日本のそれとはあまりへだたらぬ古代中國の精神態度を次のように特色づけます。即ち「精神の自然への沈潜」であり、これは「知性と意識の有限」と同義語であります。(哲學の體系と歴史、序論二二六頁—二七二頁)。ヘーゲルは精神と自然とのこの特に東洋の一致は、意識の「最も低い最も不信仰」の段階であり、しかもここでは、「自由の土壤」が欠け、自由意識の欠乏のために「恐怖は東洋の支配的力テゴリーである」この意見を著してあります。

人間が世界に対してどの態度のあり方は、人間が自己自身を自然の一片と感ずるか、自然にまざるものと感ずるか如何に決定的に依存するものであること我々は見るのであります。日本人の精神態度に於ける漸進、憂鬱、憂うつ、の要素は、ヘーゲルの言うところのこの恐怖と関連してあります。日本に於いてはあらゆる意識の強制主観を無能力に甘受して来ました。住民の大多數は、個人的自己意識の特性を自分だけがもつ少數支配者のために、常に唯々語々として自己の幸福の觀念を行つて来たのであります。

しかしながら東洋的精神態度の特色づけがそのように適切であるとしても、ヘーゲルの価値づけを我々は今日では非難に堪へないと思ふかも知れません。なぜなら自我の世界に優越する自律は世界に實際何を与えたものであろうか。我々が偏見なく眺めれば、次のような答しかないかも知れません。即ち何が良きもの、生活に役立つものと同じく悪いもの、生活に敵対するものをも生み出したわけであり技術や工業は人間を益々自己の生産物の奴隷たらしめ、絶えざる戦争と革命のため平和は今日例外の状態となつてしまつたのであります。しかしながら